

論評、国際助産師連合、助産師、専門性1

国際助産師連合は世界中の助産師団体を代表し助産師の専門性を強化し、女性と新生児の健康の改善に努めている。2014年国際助産師連合のテーマは「助産師：世界中の女性の健康を改善する」というものであった。サブテーマは4つありどのような診療の場においても助産師にとって考慮すべき重要なトピックである助産師の仕事に対する情熱や責任に関しては至る所で目にしたが、助産師の置かれた状況が違っている。世界中で助産師は女性のニーズと合致しない圧力などに直面しながらも女性中心のケアを提供しようと戦っている母体死亡周産期死亡の92%を占めている73か国において助産師、看護師、医師の割合は世界の42%に過ぎない。質のよい助産サービスを実施することによって世界の女性と新生児死亡の2/3を回避することができる。報告書には助産2030と題し、将来達成するために必要な10の目標と方針が定められ詳細に述べられている。次の国際助産師連合会議は2017年6月18日から22日にわたってカナダのトロントで開催される。その会場で皆さんとお会いしたいと思っている。

Midwives Improving Women's Health Globally: Highlights from the International Confederation of Midwives 30th Triennial Congress

Frances E. Likis, CNM, NP, DrPH, FACNM, FAAN, Editor-in-Chief

J Midwifery Women's Health. 2014 Jul-Aug;59(4):373

早発陣痛、早産、リスク因子、ストレス3

本研究は、妊娠中に女性が自覚したストレスのレベルが早産や早発陣痛と相関するか否かを検討しようとしたものである。妊娠16週以前または20～24週において1,069名の低所得者層の妊婦を対象に自覚されたストレスのレベルを調査した。ストレスのレベルをスコア化し平均値を求めた。早産は妊娠37週未満の自然分娩と定義した。早発陣痛は頸管の変化を伴う妊娠20週超から37週未満の規則的な子宮の収縮と定義した。結果に影響を与える可能性のある因子、即ち交絡因子とは独立し、妊娠中の自覚されたストレスのレベルは早発陣痛とは相関せず、そのオッズ比は1.10という結果であった。しかしながら、妊娠中のストレスのレベルは早産と相関する傾向が認められ、そのオッズ比は1.49という結果であった。

早発陣痛の最も強い予測因子は前回の妊娠における早発陣痛の既往歴であった。早発陣痛の既往歴を有する女性においては早発陣痛の既往歴を有しない女性と比較し、現在の妊娠において早発陣痛を経験する尤度は2倍上昇するという結果が得られ、そのオッズ比は2.16であった。早産のリスク因子として、今まで知られているアフリカ系アメリカ人、中絶の既往歴、早産の既往歴などは早発陣痛とは相関しなかった。早産の最も強い予測因子は前回の妊娠における早産の既往歴でそのオッズ比は2.55と有意な上昇が認められた。妊娠中に自覚されたストレスのレベルは早発陣痛とは相関しないが、早産のリスク因子となる可能性が示唆された。妊娠中のストレスは早発陣痛とは相関せず、早発陣痛に関わる因子は早産とは異なる可能性が示唆された。

Role of Perceived Stress in the Occurrence of Preterm Labor and Preterm Birth Among Urban Women

Laura Seravalli, MPH, Freda Patterson, PhD, Deborah B. Nelson, PhD

J Midwifery Women's Health. 2014 Jul-Aug;59(4):374-379

妊娠、運動、留意点10

本論文は妊娠中の運動に関する見解を示したものである。それぞれの設問に対する回答が示されている。設問は妊娠中の運動は安全か、妊娠中の運動が何に役立つのか、妊娠中にはどの程度の運動がよいのか、妊娠中に安全な運動とは何か、妊娠中の運動で気を付けることは何か、妊娠中にはいけない運動とは何か、妊娠中に運動してはならない理由は何か、運動を止めるのはどのような時かなどとした。

Exercise in Pregnancy

J Midwifery Women's Health. 2014 Jul-Aug;59(4):473-474

早期正期産児、満期産児、リスク因子、母乳栄養、NICU、入院期間 12

2009年、早期正期産児と満期産児においてどのような差異が認められるか調べるために、入院の状態と母乳栄養の状態を指標に後方視的記述的コホート研究を行った。早期正期産児4,052名と満期産児6,825名を対象に調査を行った。妊娠リスク評価モニタリングシステムの調査に参加した母親の児を対象とした。早期正期産児群は妊娠37週(260~267日)の出生児とし、満期産児群は妊娠40~41週(282~294日)の出生児とした。二次分析はNICUへの入院、入院期間、母乳栄養の開始と持続期間、母乳栄養を開始しなかった母体側の理由、母乳栄養の開始と持続の予測因子とした。

早期正期産児はNICUへの入院のリスクは高くそのオッズ比は1.56、入院期間は3~14日と延長するものが多くそのリスクは1.16、また、母乳栄養を開始しないもののリスクは高くそのオッズ比は1.5といずれも満期産児群と比較し有意に高い値を示した。早期正期産児は母乳栄養を開始しないものの予測因子となりそのオッズ比は1.42、母乳栄養の持続期間が4週間未満に留まるものの割合も高くそのオッズ比は1.309という結果であった。

母乳栄養を開始しないサブグループに認められた予測因子は、アフリカ系アメリカ人、その他の非アフリカ系アメリカ人と比較した場合の白人、母親の教育歴の低下、婚姻状態、母体の喫煙、母体の内科的リスク因子、などであった。母乳栄養期間が短縮するサブグループに認められた予測因子は、白人と比較した場合のアフリカ系アメリカ人、その他の非アフリカ系アメリカ人と比較した場合の白人、母親の低学歴、婚姻状態、母体年齢が20歳未満、母親の喫煙などであった。早期正期産児のNICUへの入院と入院期間に関する母親から得られた調査結果は診療記録の結果と一致し、早期正期産児の母乳栄養に関する新たな情報も収集することができた。

The Influence of Early-Term Birth on NICU Admission, Length of Stay, and Breastfeeding Initiation and Duration

Debra V. Craighead and R. K. Elswick Jr.

J Obstet Gynecol Neonatal Nurs. 2014 Jul/Aug;43(4):409-421

社会支援、褥婦、障壁 23

産褥期の母親の社会支援は適切な母親と家族の健康状態を維持するために重要である。そこで分娩後1年間に母親が認識する社会支援に関する特異的な障壁について調査した。定性的アプローチを用いて社会支援に関わるデータをテーマに沿って分析した。調査はピッツバーグの都市部の医療センターで行われた。複数の公共場所にポスターを掲示し参加者を募ったところ、調査開始する前の1年間の間に出産に至った31名の女性が調査への参加に同意した。3つのフォーカスグループに分けグループ対話形式で自由に発言してもらいデータを収集した。

社会支援に関わる大きな定性的なデータの中から抽出し、顕著な社会支援の抑制別に分析した。明らかになった主要なテーマは信頼できる児のケアの活用、児のケアに関わる費用、児のケアの要求、変化する優先事項、短期滞在者および家族の活用、などであった。

児のケアの要求、変化する優先事項のような社会支援に対する緊急の障壁は社会経済状態にかかわらず女性にとって難しい問題となっていた。しかし、家族の活用状態に関わる問題、信頼にたてる児のケアの活用、一時的なライフスタイルに関わる問題などが今回の対象者が指摘する障壁に関わる要因であった。

Barriers to Optimal Social Support in the Postpartum Period

Jennifer L. Barkin, Joan R. Bloch, Kristina C. Hawkins, and Tiffany Stanfill Thomas

J Obstet Gynecol Neonatal Nurs. 2014 Jul/Aug;43(4):445-454

母親の気分、主観的睡眠の質、評定、周産期 30

情動評価理論を用いて母体の気分と自己報告に基づく睡眠の障害との密接な関係に関わる心理学的メカニズムについて調査した。オーストラリアのメルボルンのNorthern Hospitalに関わる妊婦健診クリニックで研究を実施した。妊娠第3三半期の122名の妊婦を対象とした。参加者には妊娠第3三半期、出産後7~10日および10~12週を経た時点において、PSQI(Pittsburgh Sleep Quality Index)とEPDS(Edinburgh Postnatal Depression Scale)に回答を求めた。

不良な睡眠の質、不良な睡眠に関わる日中の仕事の機能障害、global PSQI score からみた心理的な問題は、対応能力の低下、母性に関わる心理的な問題、また、将来に対するネガティブな見通しなどと相関するという結果が得られた。

自己報告による睡眠の質の低下を示す項目は、従来の研究で明らかにされている母体の苦痛に関わる問題と同様のものである。このような知見は自己報告による睡眠の質と母体の気分との間の相関を理解する上で有用である。今回得られた調査結果の意義に関しても検討した。

Exploring the Association between Maternal Mood and Self-Reports of Sleep during the Perinatal Period

Soledad Coo, Jeannette Milgrom, Peter Kuppens, Pauline Cox, and John Trinder

J Obstet Gynecol Neonatal Nurs. 2014 Jul/Aug;43(4):465-477